

# 混迷の時代を生き抜くための視点<sup>i</sup>

千葉商科大学商経学部学部長／教授

太田 三郎

OTA Saburo

プロフィール

千葉商科大学を卒業後、青山学院大学大学院経営学研究科博士課程を修了し、千葉商科大学商経学部専任講師、准教授、教授を経て、2014年から商経学部長となる。博士（経営学）。



わが国経済や世界経済は、穏やかな回復基調にあるとはいえ、かつての産業革命期、あるいはキャッチアップ型成長の時代に経験した活況の時代からは程遠い。

新興国での賃金上昇に伴って、安価な労働コストに支えられた成長モデルが力を失いつつある中で、先進国のグローバル企業はより革新的な製品やサービスの投入によって利潤を獲得しなければならない状況にある。

わが国に目を向ければ、急速に進行する少子高齢化を発端とした労働人口や企業数の減少という構造的な課題と共に、労働時間の短縮という新たな課題にも直面し、労働生産性の向上は避けられない課題として認識される。

後継者難や廃業の増加によって、特に国内経済を支えてきた中小製造業が受ける影響は深刻で、高度な技術力を持ちながら後継者の不在、あるいは財務の脆弱さから廃業や倒産を余儀なくされるケースは少なくない。このままでは、中長期的にわが国の核心的な競争力の失墜が懸念される状況である。

一方、わが国経済と密接な関係を持つ東南アジア諸国においては、産業の高度化と中間層の所得増大に向けた新たな成長戦略を展開している段階であり、わが国を含めた周辺国とのパートナーシップに門戸を開いている。このように、世界各国の経済状況と各々が抱える課題は様々であり、政治、社会、経済の「混迷」は当面続くと思われる。

果たして、我々は多くの課題を抱えたまま、不透明な将来をただ悲観するしかないのだろうか。この「混迷」の時代を生き抜くカギは身近なところにあるのかも知れない。

経済が成長と停滞を繰り返すことについて、旧オース

トリア・ハンガリー帝国に生まれたヨーゼフ・アロイス・シュンペーター（1883－1950）は、「経済成長を起動するのは企業家（アントレプレナー）による新結合（ニューコンビネーション）である」と説いた。そして、「イノベーションが起きなければ市場経済は均衡状態（利潤消滅）に陥る」という考えによって経済停滞のメカニズムを説明した。

この「新結合」（イノベーション）は、必ずしも最先端技術や新たな科学的発見に基づく必要は無く、既にある財貨の新たな用途開発や販路開拓をも含めた「未知の組み合わせ」によって意図的に他者との均衡を崩し、価格差（利潤）を生み出すものだ。

イノベーション理論の登場から90余年が経過した現在では、市場シェアの高いモバイル機器メーカーが製品企画から製造までをすべて自社で手掛けることは無くなり、EMS（Electronics Manufacturing Service）との分業へと移行した。

分業化により製品開発のリードタイム短縮や、商品サイクルの短期化に対応し、より高度な製品を市場に先行投入して利潤を生み出すこともイノベーションの一例である。

製造業に限らず、こうした分業化の成功は中小企業を中心としたビジネス生態系（エコシステム）の可能性を示すもので、特に高度な技術や斬新なビジネスプラン、国際的なネットワークなどの強みを持つ中小企業が大きな存在感を示すだろう。

インターネットが世界的に普及し、異業種間での協業は加速している。混迷の時代を生き抜くには、大企業、中小企業を問わず、均衡状態を崩す組み合わせを常に意識する、という視点を持つべきだろう。

<sup>i</sup> 本稿は、拙稿「序章 混迷の時代を生き抜くための視点」『企業倒産調査年報 2017 年度版』一般財団法人企業共済協会、2017 年 8 月、をもとにして加除修正したものである。